

フランスにおける就業日の昼休み： 幸福の一要素と捉えられるか？



France CAILLAVET

INRA--ALISS UR1303、パリ・サクレ大学

JILPT・EHESS/FFJ 共催・ワークショップ
働き方改革・生産性向上・well-being at work
— 日仏比較・労使の視点から —



於：東京、2019年3月15日



本研究は以下の方々からご支援いただいた:

概要

- ❖❖ 1. 幸福と時間的側面
- ❖❖ 2. フランスにおける就業日の昼休み
- ❖❖ 3. 結論と展望：日本の枠組との関連性はどうか？

概要

❖❖ 1. 幸福と時間的側面

- ❖❖ 幸福に対する経済的アプローチ
- ❖❖ 測定における争点および時間利用調査
- ❖❖ 幸福の一要素としての食体験

幸福に対する経済的アプローチ

- ❖ 幸福と経済的アプローチに関する: 出典: Easterlin(1974年)、幸せの経済学 (Kahneman(1999年))
- ❖ 幸福と経済的パフォーマンス
 - ❖ 職場での満足度と生産性
 - ❖ ストレスと満足が生産性に及ぼす効果: (Halkos & Bousinakis(2009年))
 - ❖ 仕事と労働者の私生活の重複(タイミング、持続時間): 日本は世界で最も労働時間が長い国に数えられる(cnbc、2018年6月1日)
 - ❖ 職場での満足度は社会職業的分類と社会人口学的特徴に左右される(フランス、Ricroh(2011年))
 - ❖ 生理学的時間とパフォーマンス
 - ❖ 健康に悪影響を及ぼす食習慣(フランスにおける肥満: St--Pol & Ricroh(2012年))
 - ❖ 認知能力にとっての睡眠の重要性(Mazza et al. 2016年)、健康にとっての睡眠の重要性(Simpson(2009年)、日本: Liu , Uchiyama, Kim et al.(2000年))

幸福の測定における争点

❖ 経済学と心理学

- ❖ 客観的尺度と主観的尺度の対比

- ❖ 所得との関連

- ❖ 客観的幸せ (Kahneman (1999年))

- ❖ 満足度: 主観的スコア (幸福、幸せ、享樂)

 - ❖ 幸福の測定と、幸福に対する金銭的価値の帰属 (Clark & Oswald (2002年))

 - ❖ 上記の尺度の限度 (Ricroh (2013年))

❖ 時間的側面

- ❖ 時間利用と幸福の尺度 (OECD (2013年)、Gershuny (2011年))

 - ❖ 健康関連活動持続時間の測定 (睡眠、食事、運動、パーソナルケア)

 - ❖ 個々の活動/状況に費やす時間に対する主観的スコアの割り当て: 情緒的スケール: 「不快感指数」。個々の活動における楽しみ: 「享樂度スコア」

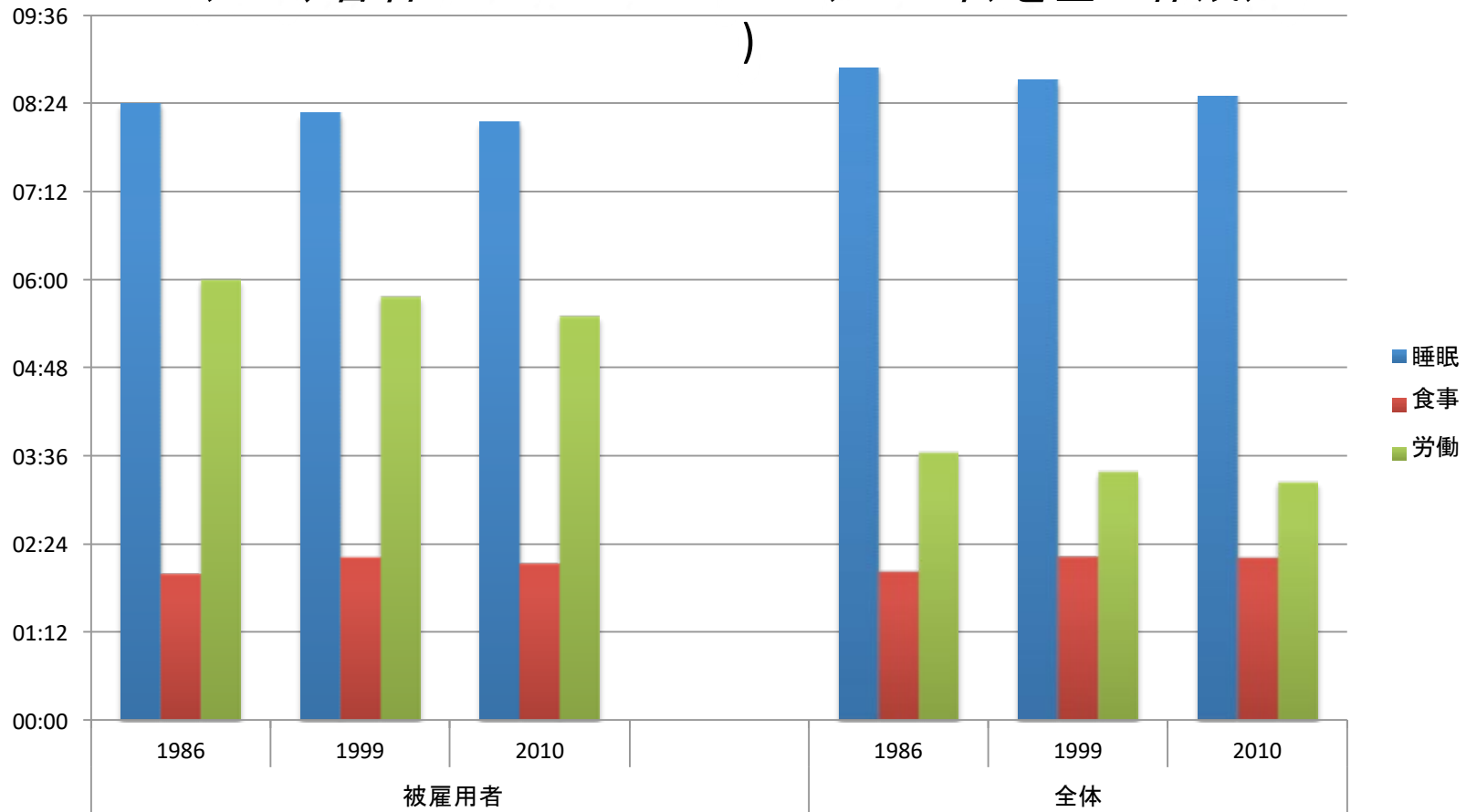
時間利用調査(TUS)

被雇用者の日々のスケジュール

- ❖ TUS: 様々な行動を研究するための内容豊富な手段
 - ❖ 24時間の行動内容: 生理学的時間、労働、家事、移動、余暇
 - ❖ 日本を含め多数の国々で利用可能
- ❖ フランスの被雇用者が労働、食事、睡眠に費やす時間
 - ❖ **他の活動との比較、1986年 - 1999年 - 2010年**
 - ❖ 制約される時間(労働、家事)が減り、余暇時間が増加
 - ❖ 生理学的活動の安定性: 睡眠時間の減少、食事時間の増加
- ❖ **社会職業分類とジェンダー別の調査結果(2010年)**
 - ❖ 両方の変数における重要な変動
 - ❖ 賃金労働者と自営業者の対比:
自営業者は労働時間が長くなり、睡眠時間が減り、食事時間が増えた
 - ❖ 男女の対比: 男性は労働時間が長くなり、睡眠時間が減り、食事時間が増えた
⇒ 労働を男性は睡眠で、女性は食事時間で「埋め合わせる」

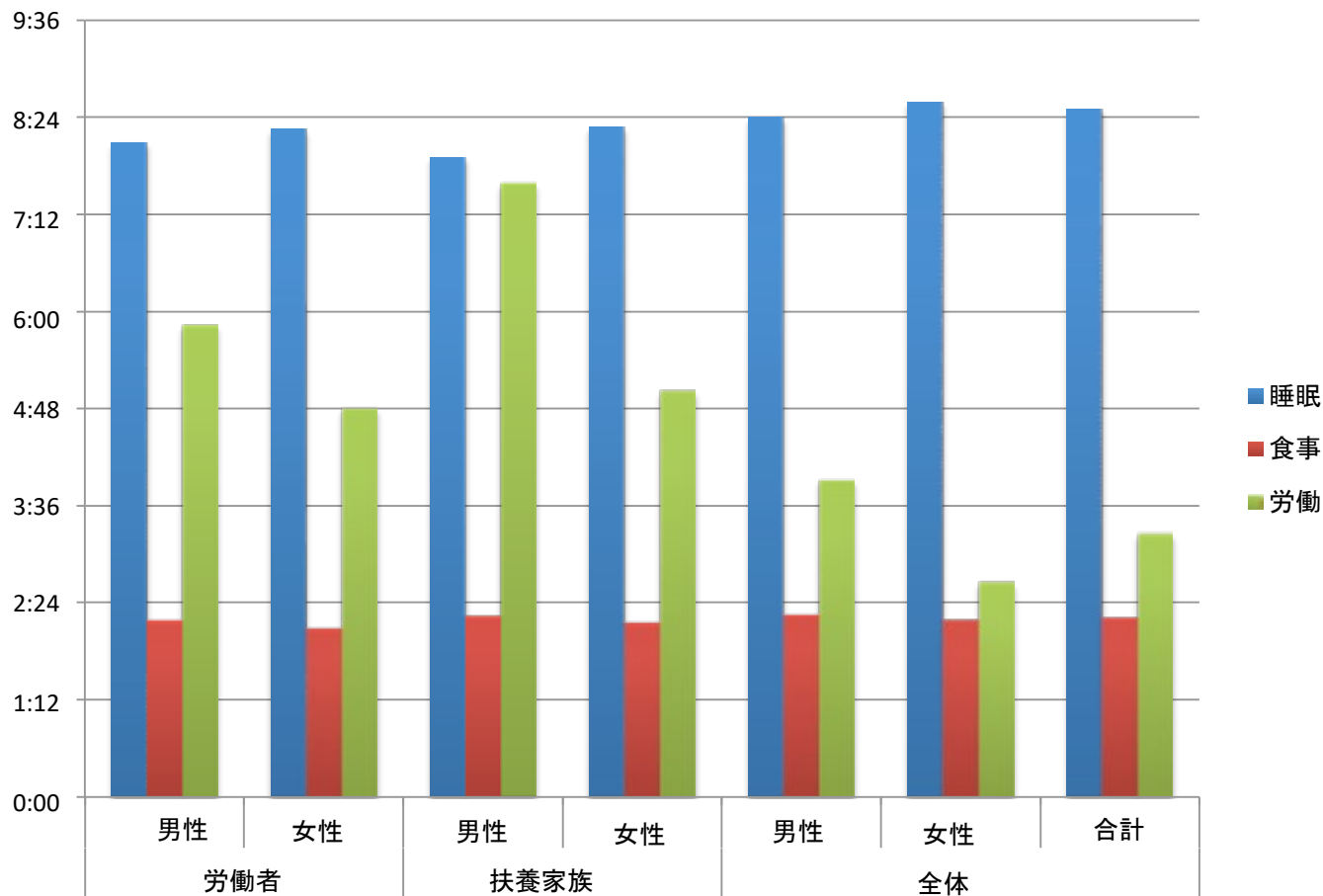
主要な活動に費やす時間 睡眠、食事、労働 1986年-1999年 - 2010年

(被雇用者(左)および全体(右)の1日当たり時間:分数)
(TUS、著者がRoumier & Ricroh (2011年)を基に作成)



社会職業分類および男女別の 睡眠、食事、労働に費やす時間(2010年)

(TUS (2010年)、著者がRoumier & Ricroh (2011年)を基に作成)



フランスにおける満足度調査

- ❖ Sen--Stiglitz--Fitoussiの報告書(2009年)における勧告: 公式統計における主観的幸福情報収集
 - ❖ 2満足度に関する2つのデータソース
 - ❖ 2010年SILCサーベイ: 現在の生活、住宅、仕事、余暇、対人関係(成人25,000名)
 - ❖ 2010年TUS: サブサンプルにおける特異的モジュール; 1000世帯、個人1600名、2600件の日誌
 - ❖ 2010年TUSにおける測定
 - 主観的スケール(その時点では楽しかったか、不快であったか?)
 - 享楽度スコア: 7レベル: -3 ~ +3
 - 費やした時間が40%を超える場合は+3と評定する
- ❖ 仕事に対する満足度に関する調査結果
 - ❖ 仕事に対する満足度は、社会職業分類によって異なる(Ricroh(2011年))
 - ❖ 高 ⇒ 低: 自営業者、作業員、被雇用者、自由業専門職および経営者
 - ❖ 就業日数の多さだけに関連するわけではない。自営業者は就業日数が多いという結果である。

幸福の一要素としての食体験

❖ フランスにおける食習慣の特徴

- ❖ 1986年から1999年にかけて食事に費やす時間が増え(1日当たり13分増加)、その後は横ばい(英国とスペインでは減少(DiazMendez))
- ❖ 他の国々と比べ、「主たる活動」に挙げられることが多い(St-Pol)
- ❖ 低社会階級層では食事が特別な地位を占める

❖ フランスにおける食料と享楽に関する調査

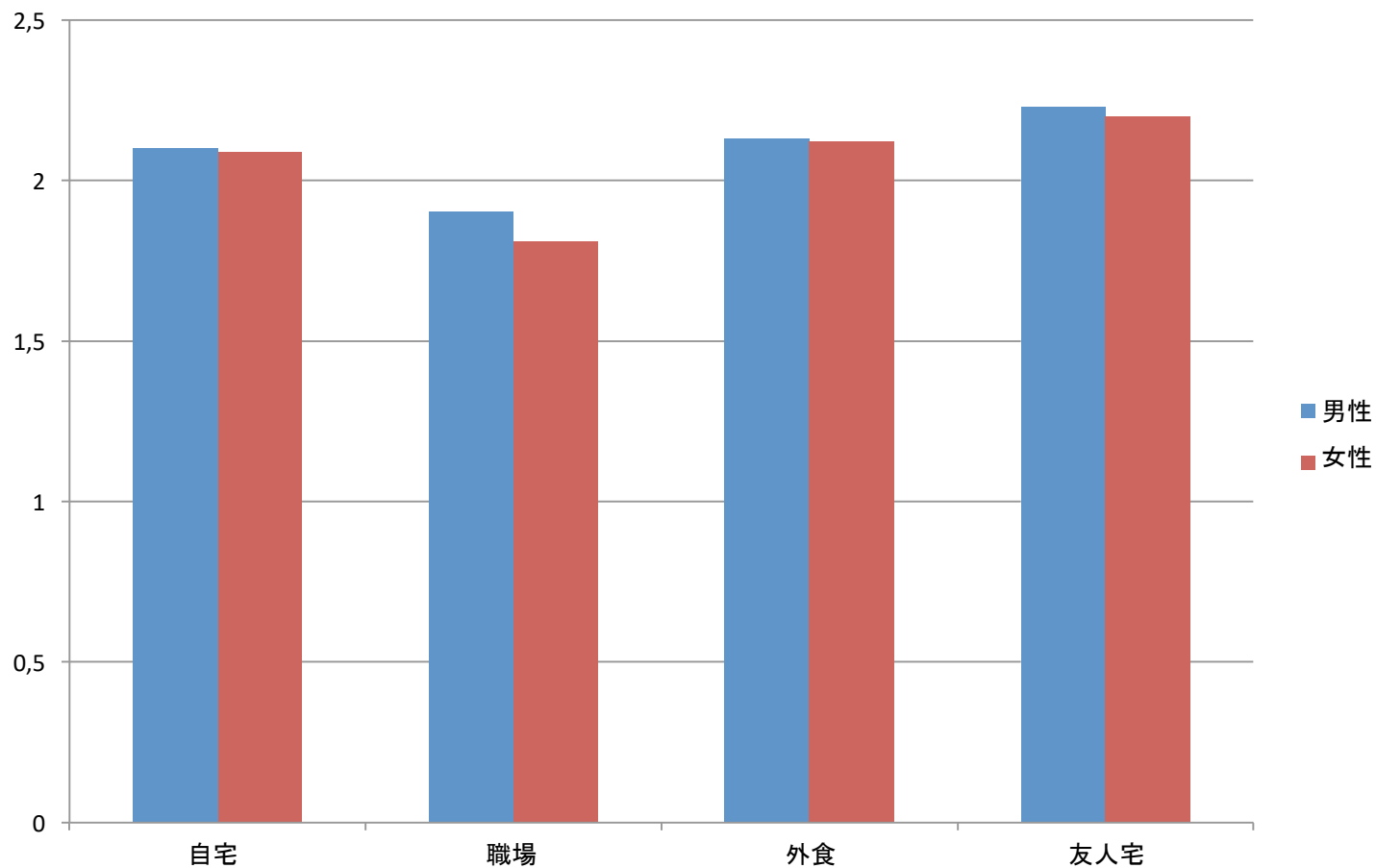
- ❖ 2010年TUSに限られた特異的モジュール(Ricroh(2011年、2013年))

❖ 食事を楽しむ: 享楽度スコア

- ❖ 他の活動との高い格付けの対比: 読書または音楽鑑賞と同様に楽しみである(St-Pol & Ricroh(2012年))
- ❖ 最も若い世代または社会経済的地位が高い人々にとってはそれほど楽しみではない
- ❖ いつ(食事の種類: 昼食を挙げる人が多い)、どこで(友人宅)、誰と(配偶者)(Caillavet & Lhuissier(2015年))

フランスにおける平均的な食事の楽しみ 職場を挙げる人は最も少ない

(Caillavet & Lhuissier(2015年)、2010年TUS、享楽度スコア)



被雇用労働者の昼休みに関する調査

- ❖ 仮説: 食事パターン(昼休み)は労働者の幸福に関係する
- ❖ パターン
 - ❖ 食事の状況: 場所
 - ❖ 食事に費やす時間に対する集中: 持続時間
- ❖ 労働者の特徴を昼休みのパターン別に特定する

概要

- ❖ 2. フランスにおける就業日の昼休み
 - ❖ 当方のデータ
 - ❖ ケータリングの選択肢
 - ❖ 持続時間

フランスにおける被雇用者の 昼休みに関する社会経済的枠組み

- ❖ 自宅から勤務先まで遠く、自宅から遠く離れて食事する人々の長期的増加傾向
 - ❖ マス・ケータリングの選択肢の開発
 - ❖ 労働力への大規模な女性の組み入れ
- ❖ 立法上の枠組み
 - ❖ 空間規制: 1960年10月の法律第5号: 従業員数26名以上の企業は職場に食事専用空間を用意しなければならない
 - ❖ 休業時間規制:
 - ❖ L3121-16: 労働6時間毎に20分の休憩
 - ❖ 実情: 30分以上の休憩
- ❖ 限られた時間内でのケータリングの選択肢の多様性
 - ❖ フランス: 社員食堂を用意 (EdenRed)
 - ❖ ケータリングの選択肢の社会的差別化: 労働生産性を考慮する温情主義、社会化 (Gacon (2014年)、Lhuissier (2014年))
 - ❖ 栄養面から見た内容: 出勤日の自宅外での昼食として、オープンサンドイッチ、でんぷん質食品、生鮮果物・野菜、清涼飲料水を摂る人々が増えている (Zaoui et al. (2016年))

当方のデータ

2010年TUSにおける食事活動調査結果

- ❖ 欧州レベルで調和の取れたツール
 - ❖ 就業日と週末(休日)の時間帯を10分単位で区切る
 - ❖ 活動の種類、場所、持続時間、相手
 - ❖ 昼食の特定
 - ❖ 食事にまつわるエピソード(準備と片付けを除く)
 - ❖ 11時30分～14時30分
(St-Pol & Ricroh (2012年)、Lhuissier et al. (2013年))
- ❖ 被雇用者の昼休み: 主な焦点
 - ❖ **場所:** ケータリングの選択肢/可用性
 - ❖ **持続時間:** 昼食時間
 - ❖ **相手:** 社会人口学的特徴、社会職業的立場
- ❖ 当方の現役世代サンプル
 - ❖ 16歳以上
 - ❖ 6,945名

場所: 昼食時のケータリングの選択肢

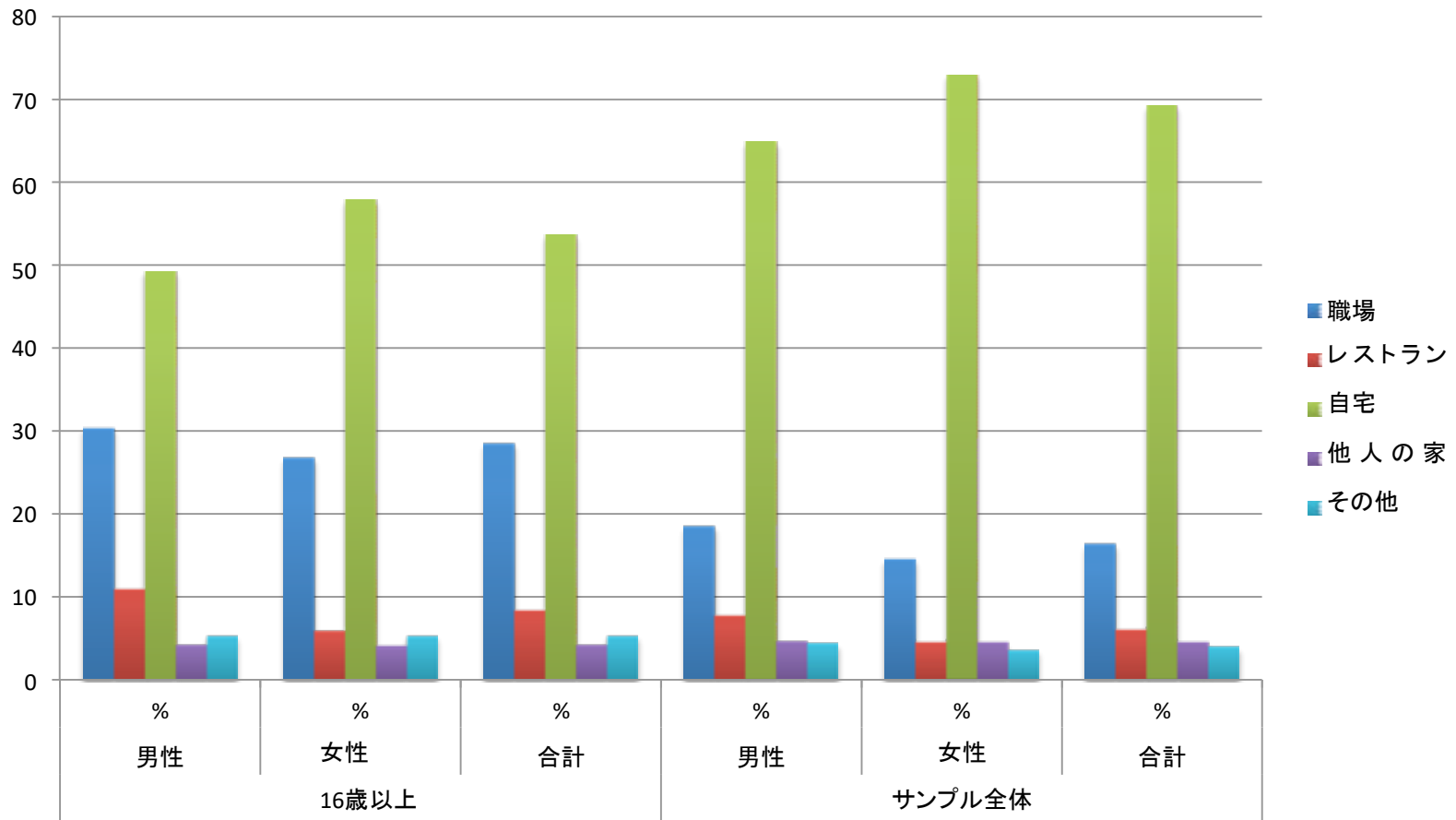
被雇用者、2010年 TUS 2010 (*Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年)*)

- ❖ 自宅/自宅外での昼食
 - ❖ 自宅での昼食が依然、過半数を占める(54%)
- ❖ 自宅外での昼食を選択する人々は46%
 - ❖ 職場での昼食(事務所、社員食堂): 29%
 - ❖ レストランでの昼食: 8%
 - ❖ その他の場所: 他人の家、移動中など: 9%
- ❖ 自宅外で昼食を取る確率に関する社会人口学的発生率(ロジット分析)
 - ❖ 男女別: 自宅で昼食を取るのは女性が多い(58%)
 - ❖ 比較的多い年齢層: 若者世代(45歳未満)
 - ❖ 比較的多い世帯構造: 子供を持つ独身成人、独身成人
 - ❖ 比較的多い社会経済的地位: 所得(第4四分位)、学歴(大卒以上)
 - ❖ 比較的に少ない、低めの社会職業的立場: 農業者、雇われ職人、工員
 - ❖ 経済セクター: 民間に多い+(h)

場所: ケータリングの選択肢の男女比較

(被雇用者/合計、2010年TUS)

(Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年))



持続時間：昼食時間

被雇用者、2010年 TUS 2010 (*Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年)*)

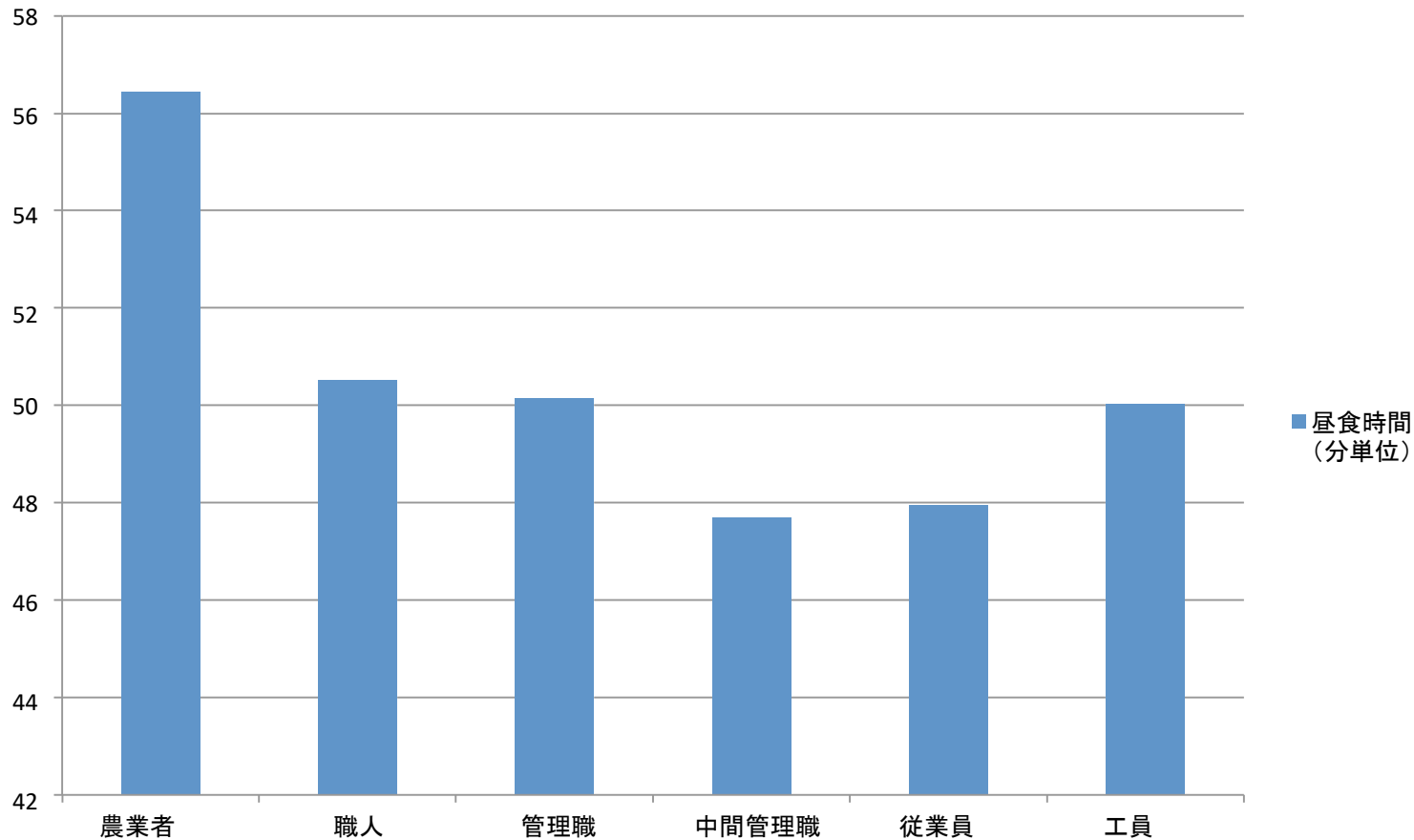
- ❖ 国民全体と比較すると昼食時間は非常に安定している
 - ❖ 被雇用者 対 全体：49.08分 対 51.34分
- ❖ 被雇用者：
 - 昼食時間はケータリングの選択肢によって異なる(主要な3種類の場所)
 - ❖ 最短 - 自宅：44分
 - ❖ 最長 - レストラン：64分
 - ❖ 中間 - 職場：49分
- ❖ 昼食時間は社会職業的立場によっても異なる
 - ❖ 農業者が最長：56分
 - ❖ 中間的立場の人々が最短：48分
 - ❖ 両方の変数を統合
- ❖ 昼食時間に関するSESおよび社会人口学的発生率

社会職業分類別に見た昼食時間(1)

農業者、職人、管理職、従業員、工員(1日当たり分単位)

(Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年))

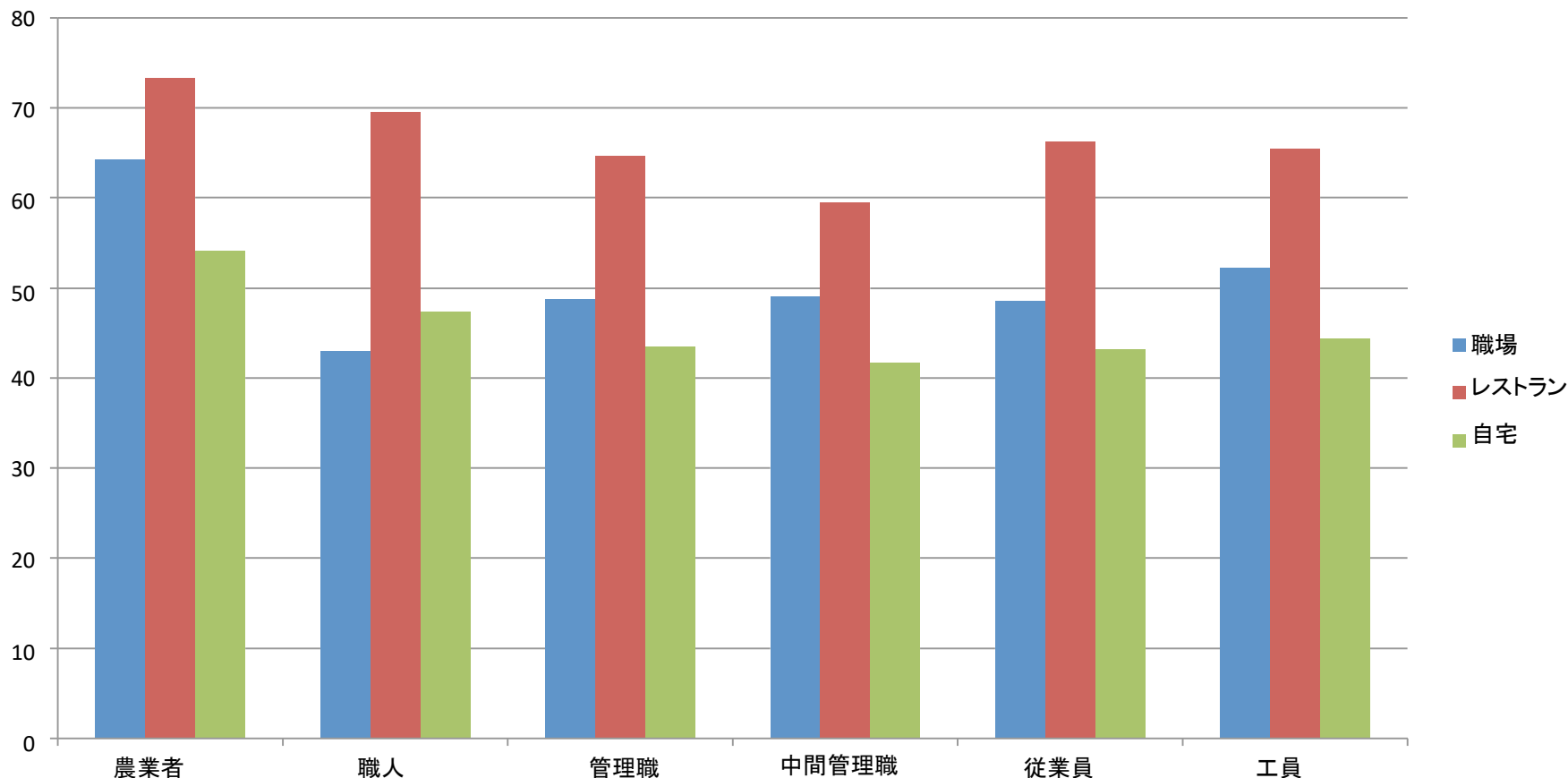
図2 社会職業分類別平均昼食時間



社会職業分類別に見た昼食時間(2)

(3つのケーティングの選択肢: 職場、レストラン、自宅)(1日当たり分単位)

(Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年))



昼食時間戦略:参加率/持続時間

(Lhuissier, Caillavet, Cheng (2018年))

- ❖ 参加率と持続時間は異なる傾向を示す
 - ❖ ケータリングを選ぶのは食事時間が短い人々ほど多い
 - ❖ 自宅とレストランの対比
- ❖ 社会人口学的変動性は、持続時間よりもケータリングの選択肢が大きい
 - ❖ ケータリングの選択は社会職業的立場の違いと一致しない:管理職は職場で昼食を取る頻度が高い
 - ❖ 各年代、学歴、所得水準の男女別発生率
- ❖ 限度
 - ❖ 昼食時間と昼休みを比較するとどうか？
 - ❖ 昼休みの測定
 - ❖ 自宅:食事に関連する家事(準備、片付け)など
 - ❖ 自宅外:買物など
 - ❖ 関連する移動はどうか？

概要



❖ 3. 結論および展望

結論および展望

日本での枠組みとの関連性はどうか？

❖ 結論

- ❖ フランスでは食事は幸福に欠かせない要素である
- ❖ 食事に費やす時間は依然長く、安定傾向にある
- ❖ 被雇用者でさえ、特に男性は昼食時間がかかなり長い

❖ 展望：日本にとっての関連性はどうか？

- ❖ 食事の伝統の多様性 (Aymard, Grignon, Sabban (2013年))、食料に関連する楽しみとダイエット/健康面の多様性 (Rozin, Fischler, Imada et al. (1999年))
- ❖ 公共政策の役割：立法枠組みはどうか？
- ❖ 労働者の自由度はどうか？ 会社からの圧力、罪悪感 (例：休暇時間が十分に活用されていない)
- ❖ 日本の被雇用者の幸福について日本のTUSから答えを得られるか？

ご清聴ありがとうございました